

0. 漢字各字のプロファイリングを試みること

漢字が日本に来てから千数百年、初めは中国語の文書を日本語で受け入れる活動の中に専らあった漢字が、次第に、日本人の日本語活動の中にあるようになり、今は専らそのようである。漢字は一字一字働きが違うから、各字の働きを記すべく漢字の辞典が作られてきた。それらの辞典では、「音」「訓」の名において、漢字の日本語としての発音と、その字に託される日本語の単語がどのようにあるかがガイドされるほか、「熟語」と言って、その字を含む2字、3字、4字などの単語に関する情報がガイドされる。

この稿の筆者も、数年前小さな漢字辞典を一つ作った（三省堂『例解小学漢字辞典』）。その改訂版が近く出るが、改訂作業の中で時々、上記2面のガイドをするほかに、この字は日本語の語彙を支えるためにこんな働きをしているということ、言わば人の甲斐甲斐しく働く姿をスケッチでもするように、短く描いてみたい気持ちになり、例えば次のように、文字の物語を記してみた。

像

この字は「偶像」「肖像」「現像」「想像」というように、ほかの字の下についてたくさんの熟語を作ることが、「像」が上に立つ熟語となると、見つけるのがむずかしい。造語要素として、下つき要素にはなりやすいが上つき要素にはなりにくい文字であるようだ。下についての働きはどんなか。「仏像」「西郷さんの銅像」「自由の女神像」など、たいていの「像」は、はっきりした形があって、目にも見え、手でさわって確かめることもできる。それが現代では、「映像」のように、物の表面に映し出されるだけで、さわることのできない像もできた。その像がテレビ画面ではいつも動いている。また、「未来像」「理想像」「理想の父親像」のように、頭の中に描かれるだけで、具体的な形にしにくい像もある。

鐘 鈴

お寺の鐘は、太いつき棒で外から突くと、「ゴーン」と長く響いて鳴る。教会の鐘は、振り動かすと、中に下がっている玉が当たって「カランカラン」「ガランガラン」と鳴る。どちらの鐘も、英語でいえば「ベル」だ。ベルと言えば、鈴も「ベル」で、同じ仲間になる。しかし、日本の「鈴」は、手で振って「リンリン」とか「チリンチリン」とか鳴らすもの。私たちがふつうにいう「ベル」は「電鈴」で指で押して鳴らすものだ。音は「リーン」と長く聞こえるが、実際には「リンリンリン」と小刻みに鳴る音が続いているのだ。「ベル」ということは、押して鳴らす「ベル」のほかに「鐘」と「鈴」とに重なるが、日本語だけでいえば、「鐘」と「鈴」とは全く別のものだ。

これは漢字のプロフィールを作ることから、これを漢字の「プロファイリング」と言ってみよう。

漢字のプロファイリングを日本語教育の方法として使うことができると思うので、ここに提案する。教授者が作って指導の着眼点とすることもできるが、それよりもむしろ、学習者ひとりひとりが、それぞれの理解度において作り、比べ合ったりしながら、プロフィール帳を増やしていくのは、楽しい作業ではないかと思う。

プロフィール作りの基礎資料とするため、なるべく多くの語例から、漢字の造語性を類型として捉える作業をしておく必要がある。筆者がこれまでに漢字語彙を観察してきた経験から、以下に、いくつかの話題を提供する。

1. 現代を映し出す字

このごろ特にいくつかの漢字が、1字で接尾語の働きをしていろいろな言葉に付き、それがまるで流行語のように、耳にも目にも立ち始めるのを経験する。筆者がそれを最初に感じたのは「化」という字についてであった。そんな言葉を並べてみる。

◎化 核家族化 情報化 高齢化 温暖化 空洞化 ドーナツ化 液状化 少子化

「核家族化」は戦後早くから言われたが、その頃はまだ、こういう言語現象が気にならなかった。おやと思いついたのは「情報化」からである。コンピュータからこれが始まり「情報化社会」という言葉で流行した。

「高齢化」は一人の人が「老齡化」して「老化」することではなく、日本社会の人口分布が高齡に偏って行く現象で、これも「高齢化社会」の問題である。「温暖化」はオゾン層破壊による地球温暖化の恐れ。「空洞化」は、社会の生産力の基とされていたような部分が気づかぬうちに空洞になっていたという危機意識。「ドーナツ化」は都市人口の周辺への偏りだから、都心部の空洞化を意味する。「液状化」は地震によって地盤が液状になり家屋施設の倒壊をもたらす恐怖。「少子化」は「高齢化」社会の支えになるべき部分を一層弱くする、これも恐怖現象。こうして見ると、これらの「～化」は、いずれも、気づいてみたら恐ろしいことに化していたという危機感を込めた言葉である。

◎死 安楽死 窒息死 感電死 転落死 事故死 中毒死 ショック死 自然死 過労死 突然死 虐待死

普通の死に方を「自然死」と言うようになったとは、いかに自然でない死に方が目立ってきたかを思わせる。森鷗外が『高瀬舟』でユータナジーの訳語として安楽死を紹介したのが大正5年、そこには、心中という江戸時代の言葉「相対死(あいたいし)」が紹介されている。江戸時代既に2字語以外の「～死」があったのに驚くが、今のように次々と、不自然な「突然死」や「過労死」が人々を驚かせるのは、何としても現代的現象である。つい最近「虐待死」に接した。そうとしか言いようのない死に方をさせる若い親の事例が続いて、ついにこの語を見た。

◎系 文科系 理科系 利根川貯水系 塩素系漂白剤 炭酸系清涼飲料水 体育会系 お笑い系
ビジュアル系 癒し系音楽 出会い系サイト ジャニーズ系 渡来系弥生人

こういう「系」には、系統の線引きがはっきりできて具体的に「系」の範囲が指定できるものと、何となく系統性は感じられるが、所詮、主観的・気分的で、範囲の指定などできず、言う本人に、指定するつもりのないものと、2種類ある。「炭酸系清涼飲料水」までは線引きのできるもの、「体育会系」以下は気分的なものと思われるが、あるいは、筆者の認識不足で、その世界の人には範囲がはっきり見えているものもあるかも知れない。「渡来系弥生人」は極く最近知った言葉。日本列島の古い住人を「在来系」と「渡来系」とに分けて考えるための言葉だが、そうあっさり分けて論ずるのは危険だとする学者の文章でこれを知った。これは象徴的だった。こういう「何とか系」が、どうも怪しく危ない言い方だと感じていた筆者、この指摘で腑に落ちた。「系」の乱用で人心をもてあそぶのはよくないことだと。

◎族 斜陽族 社用族 太陽族 ながら族 剽軽族 暴走族 窓際族 お宅族

これは戦後日本の風俗史をあとづけるもので、全く解説を要しない。「系」が思考法に属して危険性ははらむのとは違って、走馬灯の各シーンに描くべく恰好の題材を捉えた言葉になっている。

◎剤 漂白剤 起爆剤 鎮静剤 覚醒剤 保冷剤 血圧降下剤 筋肉増強剤 筋弛緩剤 精神安定剤
入れ歯安定剤

「一服の清涼剤」という言い方は昔から聞いていた。これは、表現が比喩化されているためか、少しも薬品くささを感じさせないが、このごろ限りなく出来て来る「何々剤」は、何とも薬品くさい、いや、「薬物」くさい。覚醒剤をヒロポンで聞いたころは、それが麻薬だとも感じていなかったが、今は麻薬としてのみ聞く。筋肉増強剤は専らドーピングと結び付くし、筋弛緩剤は殺人の道具として初めて耳にした。精神安定剤も犯罪との絡みで聞くことが多い。私たちが「何々剤」をこういう流れで目や耳にしがちなのは、薬剤が悪いためではない、人間社会が悪いためである。

◎症 神経症 敗血症 感染症 高所恐怖症 骨粗鬆症 薬物依存症 アルコール依存症 花粉症
杉花粉過敏症 筋萎縮症 熱中症

現在、私たちが病気の名前を耳にすると、何々病と聞くよりは、何々症と聞くことの方が遥かに多い。「心臓病」だの「胃病」だのと言っても、広く、心臓の病気・胃の病気と理解されるだけで、病名とは聞かれない。「何々症」なら間違いなく病名だと思ふ。肝硬変、心筋梗塞、心不全、胃癌のように病も症も付かない病名、躁鬱病、ハンセン病のように病で呼ぶ病名、それに症で呼ばれるもの、医学の世界でどう区別しているのかは知らないが、こう3種類ある現在、筆者には症のものがいちばん現代の病気らしく感じられる。そこに何かの問題が潜んでいるのかどうか、まだ掴めないが、一つの現代的現象ではある。「うそつき」といえば普通の人のことだが、「虚言症」といえば歴とした病名、何か関係があるか、さて。

以上、化・死・系・族・剤・症、現代の世相を映して働く字の代表として観察した。

次に、もう少し違うやり方で、やはり現代を映している接尾語性の字を見よう。

◎力 行動力 発言力 指導力 統率力 組織力 構想力 包容力 感化力
政治力 軍事力 資金力 推進力 抑止力

破壊力 恢復力 復原力 自然治癒力 親和力 (生物学語で、ゲータが小説の題にも用いたことば)

1行目「行動力」以下は個人の能力を要素に分析するとき用いられるような言葉。2行目「政治力」以下は、国とか企業とかいうような、集団・団体・組織体が備えるべき、要素能力の名前。3行目「破壊力」以下は、一般現象の中に潜む大宇宙の力学原理を表わすような言葉。これらは「何々力」のほんの一部に過ぎない。組織立てて考えて行けば、いろんな方面に分けられる沢山の何々力を見出すことになるだろう。ものを分析的に見て構成要素を探し出すのは近代科学が得意とするやり方で、各方面に、ものを動かす素因としての「力」を発見したのも、その働きの結果だった。「何々力」を沢山見るようになったのは、そのまた言語的結果である。

◎源 情報源 資金源 供給源 栄養源 活力源 エネルギー源 感染源

源流を求める活動は、要素を探す活動と必ず並行する。突き止められた何々源が悪いものなら孤立化させ、断つようにし、良いものなら確保し補給し、移動ルートを滑らかにする努力をする。

◎層 礫岩層 砂岩層 泥岩層

保守支持層 革新支持層 無党派層 政治的無関心層

地質学が地層を見つけ出し、地学・地球物理学・古生物学などと手を組んできた結果、地球の歴史・生物の歴史・人類の歴史がだんだん分かって来た。自然存在物の中にある「層」を見つけることから、いろいろなことが分かり出して来る。人間社会の層には、見えやすい層と見えにくい層とがある。見えにくい層をうまく見つけ出していくのが社会学の大事な仕事と思われる。

力・源・層、とりあえず3文字が科学的分析に働く姿を見た。それらは、現代を「映し出す」というよりも「作り出す」働きをしている。こういう働きをもつ接尾語性漢字は、それこそ、まだ他に沢山ある。とりあえず、その一端を見たのみ。

2. 単語1語で頑張る字

「訟」という字の意味は「訴」と全く同じで、訓を与えるなら「うったえる」しかない。しかし、それを与えると「訴える」と書き分けるのが、難しいどころか不可能になるから、常用漢字表にその訓は無い。それなら、この字を同表に入れる必要が無かったではないか。所が、そうは行かない。「訴訟」という単語が現代生活に絶対必要だから。これと全く同じかそれに似た事情で、1語の存在の必要のために訓無しで常用漢字表に座を占めている字が、他にいくつもある。

◎ [単語の前字で] 逮捕の「逮」 搭乗の「搭」 拷問の「拷」 賠償の「賠」 酪農の「酪」 雰囲気「雰」

◎ [単語の後字で] 更迭の「迭」 洗濯の「濯」 妊娠の「娠」 脂肪の「肪」 機械の「械」 誘拐の「拐」

福祉の「祉」 訴訟の「訟」

ざっと見たところ、このくらいである。常用漢字表には語例が3語ずつ挙げてあるが、3語見つからない場合は2語、または1語になっている。上に並べた文字では、大部分が語例1語にとどまる。2語のものが2字で、「搭」に「搭乗」「搭載」、 「拐」に「拐帯」「誘拐」、それだけだ。「搭載」は軍艦に大砲を搭載する場合だけ。「拐帯」は法律家しか使わない。どちらも国民の日常生活には関係の無い言葉だから、これらを見れば、ここに並んだ「逮捕」から「訴訟」まで14個の言葉は、それら1語だけの存在価値によって、常用漢字表に14文字の存在権を十分主張し得る言葉なのだ知る。機械の「械」などは「機械」を日常余りに見慣れているために、ほかの言葉に使われていないとは、殆ど信じられないほどである。

一般に、大事な漢字はどういう字だと考えられるか。多分、独立1字1語の用法もあり、造語要素として前字にも後字にもなって沢山の単語を作る字が機能性の高い字と考えられ、国語教育や日本語教育で、それらが先ず大事にされるだろう。それは勿論それでよい。筆者も、そういう字から基本漢字が選ばれると思うが、それとは別に、音でも訓でも独立用法を持たず、造語がたった1語しかないという字の中にも、こんな形で存在を頑張る字があり、これには一目置く必要があるということは、認めておかななくてはならない。

3. 単義型漢字の2種類

漢字を意味の面から単義型と複義型とに分けて、それぞれに、或る姿を眺めてみる。単義型を単純単義型と単訓応用義型とに分ける。

3・1 単純単義型の字

- ◎増 [2字ともふえる意味] 増加 増大 増進 増長 増殖 加増
[何かがふえる・何かをふやす] 増員 増益 増収 増産 増水 増税 増便 増額 増幅 増量
[どんなにふえる] 急増 激増 倍增 漸増 逡増 自然増
[(ふえる)と反対と] 増減

相手の字が何であろうとも、自分の意味は常に一定で、「ふえる」「ふやす」「ます」「くわわる」「大きくなる」の域を出ない。

- ◎新 [2字ともあたらしい意味] 新鮮 新鋭 清新 更新 革新 改新
[あたらしい何か] 新車 新規 新顔 新型 新居 新年 新風 新天地 新機軸 新社屋
[あたらしくどう] 新婚 新案 新調 新設 新刊 新築 新興 新人(社員) 刷新 一新
[どんなにあたらしい] 最新 斬新 維新
[(あたらしい)と反対と] 新旧 新古 新陳(代謝)

これも、相手の字の如何にかかわらず、自分の意味は、常に「あたらしい」「あらたに」「あたらしくする」などの中にあって動かない。

- ◎漬 漬け物 塩漬け 味噌漬け 糠漬け 野沢菜漬け 沢庵漬け 浅漬け 一夜漬け 奈良漬け
漬け物の名前を挙げたらきりが無い。日本は漬け物の国である。「漬」という字は、「訓「つける」の音無し」字で常用漢字表に納まっている。文字通り漬け物のためにある、楽しい字である。

- ◎凶 吉と出るか凶と出るか 凶悪 凶器 凶行 凶作 凶兆 凶刃 凶弾 吉凶 元凶 大凶
「凶」の字のある所、「わるい」の意味でしかあり得ない。実に徹底した字である。余りにも明らかなので、「わるい」だの「あし」だのの訓さえ付かなかった。見た瞬間に悪いのだ。反対の意味の「吉」の方は「不」を付けて「不吉」といえば悪い意味になってしまうが、凶の方には「不」も付かないから意味の反転も起こらない。何としても悪いのが「凶」である。

3・2 単訓応用義型の字

「平」という字に、訓が「たいら」と「ひら」と二つ与えられているが、「ひら」も意味は「たいら」だから、ここでは「単訓」と扱う。「満」の「みちる」「みたく」、「高」の「たかい」「たかめる」「たかまる」も、単訓とする。「応用義」というのは、「平」でいえば、具体物の表面が「たいら」なのと、「平和」だの「平等」だのという抽象的意味でいう「たいら」と、意味が違えば違えば違えば、その違いは、理解力という力が容易に identify して通過できる程度のもの。こういうのを仮に「単訓応用義」と言うことにする。以下、解説するまでもないので、単に語例を並べておく。

- ◎平 たいら 物の表面が平ら 平面 平野 平原 平地 平板 平滑 平身低頭 水平
量が等しく平ら 平均 平衡 平等 公平 不公平
変りがなく平ら 平常 平生 平時 平日 平素 平熱 平服 平凡 平易
心が騒がず平ら 平安 平穩 平気 平靜 平然 平和 泰平 太平 和平 不平
- ◎満 みちる 満ちる勢い 満員 満月 満載 満水 満潮 満腹 満々 充満 豊満 干満
満ちた全体 満開 満場 満座 満室 満天 満点 満面 円満 未満
満ちて終る 満了 満期 満願
満ち足りる 満足 満悦 満喫 不満
- ◎高 たかい 見てわかる高さ 高山 高層 高所 高樓 高座 高台 高潮
数で計れる高さ 高温 高価 高額 高速 高度 高齢 高利 高価 高気圧 物価高
心に感じる高さ 高貴 高雅 高潔 高尚 高遠 崇高
高くなる/する 高騰 高揚
自分が高くなる 高慢 高言 高圧的 高姿勢 高飛車 居丈高 声高
相手を高くする ご高見 ご高説 ご高評 ご高名 ご高覧

「ご高見」以下の例は、「ご」を除けば「心に感じる高さ」の例。「ご」で相手の人への敬語となる。

4. 複義型の字

干 かわく・かわかす 干潟(ひだ) 物干し(ものほし、日曜には「物干場^{ぶつかんば}」ということばがあった。)
さわる 干涉
欄干の干 欄干
十干の干 十干 干支(えと)
弁 もの言う辯 弁が立つ 一席弁じる 弁舌 弁論 弁護 弁解 答弁 雄弁 訥弁 詭弁 関西弁
処理する辨 用を弁じる 弁償 弁当 支弁 自弁 合弁会社
ひらひら瓣 弁をひねる 花卉 合弁花 離弁花 安全弁 調節弁 切り替え弁
支 分かれ出る・分けて出す 支流 支店 支社 支出 支給 収支
つかい棒――ささえる棒 支柱 支持 支援
――邪魔する棒 支障 城を支える(寄せ手に抗する)
十二支の支 十二支 干支(えと)
[弁]は、国語政策で3字を合併した結果、こうなったもの。

5. グループ観察に適する字群

蝶 ひらひらと花間を舞う 羽を縦に合わせる 蝶よ花よ・蝶蝶夫人 マダムバタフライ
蛾 ばたばた飛んで火に入る 羽を横に広げる 「蛾眉」は美人の眉 moth がモスラに変身

鐘と鈴 最初のプロフィール例参照。どちらもベル。

亜鈴 dumb-bellの訳語。初めは「唾鈴」と書いた。定時に鐘を振り歩く役目の人が腕力を鍛えるための道具として出来た柄付きの鉄丸が「音のしない鈴=唾鈴」であった。鉄アレー。

幕 莫(バク・マク=薄い広がり)+巾(=ぬの)=布製の垂れ幕

膜 莫(同上)+月(にくづき)=臓器を覆う薄膜

舟 小さい舟。帆かけ舟。渡し舟。櫓や櫂でこぐ舟。絵になるが現代性に乏しい。漢語では「和船」。

船 大きい舟。現代の船の代表字で造語力大。船体 船員 漁船 客船。遊覧船 飛行船 宇宙船

舶 立派な船をいうが独立用法なし。「船舶」「舶来」以外に造語なし。舶来もあまり言わなくなった。

艇 小型の船。速い船。競艇 魚雷艇 上陸用舟艇 昔「潜航艇」「潜水艇」今「潜水艦」。

艦 いくさ船。軍艦 戦闘艦(→戦艦) 航空母艦(→空母) 原子力潜水艦(→原潜) イージス艦 満艦飾

航 航海から航空へ。

6. 面白い国字

峠 とうげ 鞋 こはぜ 袷 かみしも 袴 かせ・かせぎ

辻 つじ 辻すべる 込 こむ

凧 こがらし 凧 なぎ 凧 おろし

椀 もみじ 榊 さかき 柎 まさ(柎目)

鋌 ビョウ 磨 まろ 躰 しつけ 働 はたらく・ドウ

7. 漢文訓読が縁をとりもつ字：再読文字

将 将に…せんとす 将来 将然形

未 未だ…せず 未来 未然(未然に防ぐ) 未然形

当 当に…すべし 当然 当為

須 須らく…すべし 須知 必須

8. 意味はよく似ているのに使われ方がまるで違う2字

明と昭 どちらも「あかるい」「あきらか」で、名乗りは「あきら」「あき子」。成語性が全く違う。

明の造語 [前字] 明暗 名月 明快 明記 明朗 明言 明敏 明瞭 明確 明察 明晰 明滅 明白
明々白々 明星

[後字] 証明 照明 透明 鮮明 判明 表明 言明 平明 弁明 説明 釈明 糺明 幽明
自明 不明 文明 光明 灯明

[元号] 明治 明暦 明和 明応 文明 天明

[人名] 明^{あきら} 明子^{あきこ} あきらけい^{いこ} 男子の2字名前、明夫・明彦・義明・高明など、いくらでも。

昭の造語 [一般語] なし。

[元号] 昭和

[人名] 昭^{あきら} 昭子^{あきこ} 男子の2字名前、昭一・昭二・昭三・昭彦など、昭和に基づく。

9. 用字習慣が変わらずに残っている字

極 この字の音訓表の訓は「きわめる」「きわまる」「きわみ」。しかし、「決める」と意味が少しも違わない「きめる」が、以下の語で頑強に残っている。月極駐車場 極め手 極め球 極め倒し かんぬぎに極める

10. 訓がつかず、音そのまま意味になった字

常用漢字音訓表の中に、訓が与えられていない字は、かなり沢山ある。そうなった訳は、概して言えば、訓が殆ど見つからなかったもの、訓はいくつか有っても、表に入れたいほどに安定した訓が無かったもの、同訓異字を避けるために敢えて採らなかつたものと、ほぼ三つになる。或る字になぜ訓が落ち着かなかつたかを考えることは、日本語史の問題として大変大事なことだし、大いに興味のあることなのだが、筆者、まだ考えがそこに及んでいない。とりあえず、表に訓が入っていないことの背景となる事情について、なにがしかの理由を推測的に述べておく。

- (1) 異字同訓を避けて遠慮した 護「まもる」を守に護る 素「もと」を本・元・基に護る
- (2) 儒教概念の直輸入で理解したから固定訓が要らなかつた 仁・義・忠・孝・礼の類
- (3) それに当たる言葉も概念も無かつた 胃・腸・肺・腎など臓器名 俳・塔・稿・航など
- (4) 幾つか訓は有つたが定着しなかつた 愛 いとし・かなし・おし・おしむ・いとおしむ・めづ
- (5) その訓が古語めいてきた 司 つかさ 抗 あらがう 肯 がえんずる 諾 うべなう
- (6) その訓の意味が現代語から少しずれてきた 象 かたち 祖 おや 踐 ふむ 漸 ようやく

以下、いくつかの字を取り上げて、その字に於ては音が意味である所以を考える。

天 訓「あめ」は雨のものとなり、上空の天より深い意味が[天=テン]に固定した。(運を天に任せる)

点 点・線・面の意味が幾何学で近代化された。「この点で」など言う抽象的意味と「点数」の数学的役割を受け持つ訓は無い。

役 役人・役所・役場が律令の官僚制度で、早い時期に社会の上位に安定した。

核 長い間造語性乏しく過ごしたが、現代物理学の原子核以後、世界の最重要概念となり、訓無し「核」が時を得ることになった。

愛 上述(4)の通り定着訓を得ぬまま近代に及び、ヘレニズム思想とキリスト教によって精神界の最重要概念となり、音が意味に固定した。

感 五官と心による外界への反応を抽象するという和語が無かつたと見えて、早くから、それを「感^{かん}じる」と言うことになったものと思う。

察 以心伝心で他人の心を知ることを「しる」「わかる」以上の「洞察」と受け入れ、「察する」で日常化した。

発 古事記「天地初発之時」の読み方から学者を困らせた。「おこる」「おこす」「ひらく」は有力でも、現に訓にはならなかつた。結局「ハツする」が一番わかりやすい。